

中国人の日本観——郁達夫

蘇 德 昌*

中国人的日本観——郁達夫

苏德昌

要 旨

天才的な詩人・作家・文学者である郁達夫は中国文学革命の主将で、中国近代文学の先駆者であったが、その生涯は悲劇の連続であった。多くの国民或いは文学界から頹廢作家などと誹謗され、友や妻に裏切られ、母親・兄は戦争中に悲惨な死を遂げ、自分自身も何と終戦直後に日本憲兵に殺害されてしまった。

その彼が日本人は中国人を蔑視していると憤慨しながらも、日本人を心から愛し、日本文化を絶賛し、傾倒した。日中戦争で日本は本来の美しい姿を失い、歪んでしまった。軍部は戦争を起こした張本人である。軍国主義の高圧により、文学は大々的に後退し、絶滅の深淵に陥っている、と指摘し、最後まで闘い続けた。彼は日本的な中国人であり、その日本観は愛憎交錯したものである。

I. はじめに

郁達夫が詩人、小説家、文学者であることは前から知ってはいたが、その作品もろくに読んだことがなく、生い立ちも詳しくなかったので、別に関心も興味もあまりなかった。ところが、1年前に小川環樹氏の稲葉昭二氏宛ての手紙を何気なく読んでいたら、次の件が目にとまった。それは小川氏が1935年3月18日に目加田誠氏と一緒に杭州の郁達夫、王映霞夫妻を訪問した時のことである。¹⁾

「『午后、図書館及大学ノ構内ヲ四人ニテ通りテ、一緒ニ蘇氏ヲ訪問』とあるのは当時浙江大学の数学の教授だった蘇歩青氏のことです。郁氏の寓居は浙江大学にごく近い処（杭州市内）でした。」

そして、3月20日は郁達夫の案内で一日西湖、城隍廟等市内を見物し、9時頃旅館に帰ったが、又

「夜、蘇氏及び郁氏訪問、別れを告グ」

とあるのである。郁達夫との距離が何かこうぐっと縮まったような気がして、急に親近感が湧いて来た。

蘇歩青とは筆者の父であるが、父は郁達夫とは知り合いだったのである。そして、筆者も彼に
平成13年7月25日受理 *教養部

会っているのである。と言っても、筆者はその年の10月生まれなので、未だ母米子の胎内にいた訳であるが。兎に角、父も郁達夫も杭州市の大学路（郁達夫は大学路の場官弄という横町、父は大学路の燕子弄で、歩いてせいぜい5、6分の距離）に住み、交際していたのである。父は今年98歳になるが、東北帝国大学で勉強し、博士の学位を取得して、「非帝国臣民」のくせに、帝国大学の講師をした後に、母と仙台で結婚し、1930年に家族を連れて帰国し、故郷の浙江大学で教鞭をとるようになった。中国人は同郷の意識が非常に強く、父が後の終戦の年に台北帝国大学を接収に行き、台湾大学の初代の理学部長に就任したのも、郁達夫が1936年に福建省政府の参議のポストに就いたのも、みな同じ浙江省出身であり、日本留学経験者の陳儀の要請によるものである。筆者は杭州市に4年間住んだが、郁達夫が1912年に入学し、半年足らずで除名された之江大学予科も何回も行っては、その山腹にあるキャンパスから六和塔や銭塘江を眺望したものであるし、彼が1913年の春に入った蕙蘭中学はそれから38年後に杭州市第2中学になり、筆者はその卒業生である。というふうに、色々と関係があることが分かるにつれ、郁達夫が益々好きになり、彼のものにのめり込んで行った。

知れば知る程、彼こそ真のヒューマニストで、ロマンチストであり、愛国者であると思えて来た。郁達夫は魯迅、郭沫若と並ぶ中国現代文学革命の旗手・主将的な存在であり、彼の代表作の「沈淪」は魯迅の「阿Q正伝」、郭沫若の「女神」と同じように古い封建的な体制・価値観・慣習に対するダイナマイトであり、新しいデモクラシーとサイエンスへの道標である。彼は時代をリードしながらも常に庶民、若者、知識人と運命を共にし、悩み、苦しんだからこそ、民衆は彼の叫び声を自分自身の心の現れと見做し、彼を尊敬もし、愛したのである。その彼が日本をどう見るかということになお一層興味が湧いて来たのは当然の成り行きであろう。

Ⅱ. 創作即ち闘争

1. 「沈淪」

郁達夫の生きた1896年から1945年の50年間、中国は正に暗黒で、波瀾万丈の時代であった。日清戦争が終わって間もなく、日露戦争、第一次世界大戦、日本政府の21箇条突き付け、満州事変、第一次上海事変、支那事変、第二次上海事変、第二次世界大戦と諸列強の侵犯が続き、軍閥間の混戦が絶え間なく、庶民は貧困、死滅のどん底に陥られ、塗炭の苦しみを味わっていた。辛亥革命、五・四運動、五・三〇運動、北伐と民衆は引切りなしに奮起したが、光明には至らず、相変わらず暗闇の中を彷徨い歩くという有様で、特に種々の欲求が高く、感受性豊かで、神経繊細な郁達夫にとっては到底耐えられるものではなく、苦闘・煩惱の連続であった。

「沈淪」の彼の有名な件、郁達夫がある日の放課後、3人の日本人学生と一緒に下宿先に帰る時に二人の女学生に会った時のことである。彼は胸が高鳴り、下宿に逃げ帰ってかられそれが治まらず、「二人のいきいきした眼」を思い出しては色々考えるのである。

「人生百年、若い時代はただの七、八年だ。このもっとも純美な七、八年を、おれはこの無情な島国で過ごすはめになってしまったのだ。ああ、おれははや二十一歳。

枯木の如き二十一歳！

死灰の如き二十一歳！

いっそのこと鉱物質にでもなった方がましだ。もうおれには開花の日はあるまい。

知識もいらぬ、名誉もいらぬ、ただ慰め、いたわってくれる心が欲しい。自然の心、その心から生まれる同情、同情から来る愛情！

そうだ、おれの望むのは愛情なのだ！

おれの苦しみを理解してくれる美女がいたなら、彼女に死ねといわれれば死にもしよう。

美醜は問うまい。心底からおれを欲してくれる女がいたら、その女のために死んでもよい。

おれの望むのは異性の愛情なのだ！

おお天の神様、知識もいません、名誉もいません、無用な金もいません。一人のイヴをお恵みくださり、その肉体と心霊のすべてが私のものになるなら、私はそれで満足なのでございます。』²⁾

毎朝ふとんの中で罪悪を犯しては痛恨し、又全裸のイヴの後裔や中年madamの肢体の幻影に誘惑、挑発されては繰り返すの連続で、いつも慚愧の念に襲われ、体は衰弱して行くのである。

下宿先の便所のガラス窓からひそかに愛していた家主の娘が入っている風呂場をのぞき、「一目見るや釘づけにされたように動けなくなり」、

「雪のように白い二つの乳房

ふくよかな白い太もも

全身の曲線

息もつかず眺めまわすうちに、顔の筋肉までが痙攣を起こしてきた。見れば見るほど震えが激しくなり、ついには震える顔をガラス窓に打ちつけてしまった。』³⁾

ある朝、彼は彼の住む山頂の葦の傍で若い男と女の密会の場面に出会い、二人の話を聞いてしまうのである。

「地面の落葉がカサコソ音をたてる。

帯を解く音。

男がハァハァ息を吐く。

女がまた低く、どぎれとぎれにいった。

『あなた、あなた、あなた早く、早くなにしてよ。いや、いや、人に、人に見られるわ』

彼の顔色は一瞬灰色に変わった。目は火のようにまっ赤になった。上あごと下あごがガタガタ音をたてて触れあった。彼はもうこれ以上がまんができなくなり、逃げ出そうとしてはみたものの、両足はいっこうに彼のいうことをきいてくれない。』⁴⁾

彼は「畜生、犬め、卑劣なやつ、と歯ざしりして」「自分を罵り」ながらも「日本女性のかくべつ美しいところ」、ズボンをはかず、着物を着るだけの女の歩く時、一足ごとにまくれあがってちらつく赤くて短い腰巻とふくよかな足にいつも目が行くのである。遂に、彼は料理屋みたいな店に飛込み、酒を飲んで酔っ払ってしまい、明るる朝、目を覚ました時は仲居の絹のふとんの中であった。

「なぜあんな所に行ったのだ。おれは最下等の人間になりさがってしまった。悔やんでももうおそい。死のう。おれの求める愛はもう得られはしないだろう。愛のない生涯なんて、まるで死

灰の如きものではないか。このひからびた、潤いなき生涯。世間はおれを敵視し、侮辱する。血を分けた兄弟までが、おれ自身の手足までが、おれをこの世からはじき出そうとする。おれはどう生きればいいのか。この苦渋の世界に、なぜ生きなければならないんだ。」⁵⁾

抑えても抑えても抑え切れない体の悶え、身も心も引き千切られるような苦しみ、そしてその生々しくて赤裸々な描写、息が詰まるような肉薄！ 正に死に面した際の最後の絶叫である。郁達夫は一生「文学作品はみな作家の自叙伝である」ということを信じて止まなかった。⁶⁾ それ故になお「沈淪」の主人公が彼自身であることは明らかである。

この作品が発表されるや絶大なるセンセーションを巻き起こしたのは言うまでもない。嘲り、罵り、全社会の攻撃的になり、「頹廢頹唐」（頹廢、意気消沈）、「敗風乱俗」（良風美俗を害する）、「誨盜誨淫」（盗を教え淫を教える）等などありとあらゆる罵詈雑言を浴びせかけられた。でも、周作人は「沈淪」は芸術作品であると正しく評価した。⁷⁾ 中国共産党の大物教育者で、それこそ日本の文部大臣に当たる教育部長でさえ一目置くような存在で、南京大学長を務めたことがある人に匡亜明という人がいるが、20年前に中国学長訪日団を率いて東京に来て、帝国ホテルで多くの国会議員を前にして講演をしたり、あちこちの大学を視察したりしたことがあった。筆者は縁があってその団のお供をすることになったが、彼は筆者を大変可愛がってくれ、団付きの通訳をそっちのけにして「徳昌君、徳昌君」と呼んで、通訳まで筆者に頼るので、筆者は嬉しいやら困るやら、大変だったことを覚えている。その匡亜明が若い頃こう書いているのである。

「小説の中で、彼は只非常に忠実に人々が恐くて表現できない生活の一側面を表現したに過ぎず、実際この側面は程度の差こそ多少あれ、往々にして人々が共有する経験である。私の見た限りでは、彼の日常生活も普通の人と変わらず、何も異常な浪漫とか頹廢とかというものではない。むしろ彼の話しを聞いていると、彼は世故に長けているだけでなく、世間の俗事にうまく対応できる人間であるという印象を受ける。」⁸⁾

と言っている。郭沫若も「論郁達夫」の中で、次のように論じている。

「彼の清新な文章は干涸びた中国の社会に春風を吹き込んだように一瞬にして多くの若者を目覚めさせ、心の扉を開かせた。彼のあの大胆な自我の暴露は千年も万年も所謂上流階級、紳士・淑女の上品・優雅な隠れ蓑の奥に深く隠れ潜んでいたうそいつわりの、偽善的な本性に暴風驟雨のような閃光打撃を与え、えせ学者・えせ文士を発狂せんばかりに震撼せしめた。」⁹⁾ 許子東も当時の時代・民族・社会の背景、郁達夫の気質・性格・生活の主観的な要素、世紀末の思潮とヒューマニズムの外来的な要素、美学的観点と芸術情趣の表現的要素からの影響や制約を詳しく分析し、郁達夫の「頹廢」的な傾向の実質を次の二点に纏めている。

「第一、郁達夫自身の所謂『頹廢』的な傾向の実質は人生を愛しているのであって、人生を嫌って見捨てているのではない。……『憂鬱』と『希望』は郁達夫精神の両極端であって、彼は人一倍鋭敏にこの世の罪悪を感じると同時に、人一倍苦しくなる程切に正義と美を求めていたのである。」¹⁰⁾

「第二、郁達夫の創作中の所謂『頹廢』的な傾向の意気消沈は表面的なものであって、反抗こそ実質である。……彼の作品中のセンチメンタリズムや意気消沈は単純なセンチメンタリズムや意気消沈ではなく、消沈の表象の下に積極的な進取の本質が潜んでいるのである。」¹¹⁾

2. 創作の風格

許子東は郁達夫の創作の風格に就いても鋭い分析をしている。まず、郁達夫は多く自分自身の現在或いは曾ての生活から取材しており、小説・普通の記事・隨筆・詩・旅行記・日記・書信等の主役はみな本人をモデルにしている。「沈淪」の「彼」、「茫茫たる夜」・「秋柳」の「于質夫」、「南遷」の「伊人」、「煙影」・「東梓関」の「文朴」、そして、一番多い「私」。その構成、経歴、性格、言葉遣い、振る舞いから顔形まで彼そっくりである。

「『彼』の行動と運命が作品のストーリーになり、『彼』の見聞が即作品の環境になり、『彼』の心情の起伏がそのまま作品のリズムになり、『彼』の内心の衝突がすんなりと作品のクライマックスになっているのである。」¹²⁾

表現・描写の手法に於いても、彼はその視点に拘り、感情・気持・気分の分析に長け、自分の目から見たという自叙伝の形式を固辞している。次に、郁達夫の作品の最も重要な特徴は感傷的な抒情の傾向であり、彼は心の動きを重要視し、景色の描写に非常に力を入れる。彼は感情で以て風景と心理を融合統一させる。時によっては景色がつまり心情そのものである。注意すべきなのは、彼の作品の抒情の傾向はセンチメンタリズム或いは憂鬱というものであって、決してデカダンス或いは頹廢というものではないということである。最後に、郁達夫の文章は清新、綺麗、自然で、語気・口振り・味わい・色調とも彼独特のものである。総じて、

「若しも主観的な色彩は彼の風格の真率な精神を著しく示しており、抒情の傾向は彼の風格の感傷的な基調の表れであると言うのであれば、文章の特色は直接彼の風格の清新で、優雅な味わい、綺麗な色調及び自然さを構成していると言える。」¹³⁾

そして、郁達夫本人が言った次の言葉を引用している。

「私は自分一人の力で死に物狂いになって三千年来の悪勢力に立ち向かい、戦い抜きたい。私は自分自身の安楽・名誉・利益を犠牲にしても、大声を出して、中国民族の腐れ切った悪習に警告を与えたい。私はこの一本の鉄のペンで以て、あのこれ以上墮落のしようのない人心を取り戻したい。」¹⁴⁾

なんと凄絶な決意、意気込みであろう！

3. 正義の闘い

事実、彼は正義感が強く、一生悪勢力、悪習と闘い抜いた。

郁達夫が未だ東京帝国大学で勉強していた頃のことであるが、神田で中国人留学生総会の主催による、文部大臣・法務大臣・東京市長経験者で、有名な自由主義政治家の尾崎行雄の講演会を開いた。千人も集まり、盛会になった。尾崎が中国問題に触れた時、中国に対して皮肉めいた表現をした。それを聞いて、聴衆の中からある若者がすくっと立ち上がり、流暢な日本語で、興奮しながら、大声で反論した。その態度は磊落で、言葉遣いは場を踏んでおり、話しは理路整然として、筋が通っており、観点は正しい。すぐさま満場一致の大喝采を受け、尾崎も謝った。それが郁達夫だったのである。¹⁵⁾

1922年、郁達夫は余家菊のある翻訳の間違いを指摘し、大物の胡適から責められたことがあるが、彼は「胡適之先生に答える」という文章を書いて反論するだけでなく、黄仲則を題材とした

歴史小説まで書いて、胡適は自分の気に入らない者はやっつけてしまうという卑劣な文人であると批判した。権威、大物の前でもびくともしないその姿勢に、結局は胡適の方から詫言を入れた。¹⁶⁾

1923年、郁達夫は上海から北上し、北京大学の講師になり、統計学の講義を担当するが、当時「光明の南方、暗黒の北方」と言われているように、彼はその暗黒に忿懣やるかたなく、苦しみ悩む。彼はその時、日本の新聞記者にこう語った。「あなたは私のこの消沈は国、社会に対するものでもあるということを理解すべきである。昨今、世界の国々がどんな状態であるか。社会はどんな状態にあるか。特にわが中国が。それをあなたはよく見ないといけない。」¹⁷⁾ 彼は決して気力が衰え沈んでいるだけではない。その年に、彼は「文学上の階級闘争」という論文を書き、中国の文学界に於いて初めて「階級闘争」という言葉を使う。又、魯迅と知り合いになり、夏には「春風沈酔の夜」、翌夏には「薄奠」、という社会主義色彩を帯びた小説を書き上げている。

1925年、彼は武昌師範大学の教授に就職するが、国家主義派や保守派の攻撃を受ける。彼は彼らと面と向かって闘い、彼らの陰謀術策や卑劣で醜悪な本性を暴くのである。¹⁸⁾

1926年、彼は熱誠籠めて、悲憤慷慨の気持ちで、革命の坩堝である広州へと向かい、広東大学の教授になるのであるが、目や耳にしたものは何だったのであろうか。先ず、政治は、局長・部長・委員・主席等上のポストにいる官僚は総じて、清貧質素・清廉潔白であるが、その下の秘書課長或いは税務官吏・地方の県の役人・小さな団体の役員たちと言ったら、清末のとそう変わらない。民衆の幸福のためとは名ばかりで、やはり私利私欲、党利党略、陰謀術策、卑劣醜悪である。右派の勢力が圧倒的で、左派はその後で影を潜めている。次に、教育の分野では学生や教員に対して、政府は高圧手段をとっている。本当の教育は冬眠状態にあり、実質的には何もやっていない。最後に、民衆の方では労働組合・農民組合が乱立しているが、結束力がなく、まだまだ弱い。表向きは革命の根拠地でも、実際は誰かが皮肉って言うように、広東は牛乳の海みたいで、左派でもそこに落ちたら色が変わってしまう。郁達夫は「病閑日記」に「広州を出たらもう二度と来ない。こんな腐れきったところなぞに未練はない。僕がもし望みを遂げることができたら、きっと広州を肅清してやる。中国を肅清してやる。」と書き、翌年の1月に、郭沫若や創造社と袂を分かつ原因となる「広州事情」を発表し、広東政府のこういった暗黒面を完膚なきまでに暴露・批判するのである。¹⁹⁾ 魯迅も1927年1月に広州に行くが、次のような印象を受ける。

「以上はわたしがまだ北京にいたころ、成仿吾の言う『泰平楽をきめこんでいる』ブチブルだったころの話です。しかし筆を債まなかつたため、案の定飯の種を奪われ、おまけに北京から逃げだすはめになり、『無煙火薬』でドカンとやられるまでもなく、『革命策源地』まで流れついたというわけです。そこに二か月住んで、わたしはびっくりしました。それまで耳にしていたことはみんなデマ、そこは軍人と商人のとりしきる土地だったのです。」²⁰⁾

この点でも彼は魯迅と軌を一にする。

更に、1927年4月、郁達夫は「方向転換の途中で」という論文を発表する。

「目下中国革命が実際どのような状態にあるかは別として、何人といえども、わが中国の民衆の現在の努力目標は、少なくとも最小限次の三つであるということ認識・承認すべきである。

「一、今次の革命は中国民衆全体の解放を要求する運動である。

一、今次の革命はマルクスの階級闘争理論を実現するものである。

一、今次の革命は世界革命の初歩である。

……

我々民衆がやるべきことは自ずと次の二つに限る。

一、革命の武装武力を我々民衆の手に奪い戻さなければならない。

一、何とかして封建時代残留の英雄主義を打ち倒し、肅清せねばならない。」²¹⁾

彼はそれこそその4日後に起こる四・一二クーデターを予想し、蒋介石ら右派に対して警告をする。その目の鋭さといい、レベルの高さといい、評価すべきである。

1927年以降、彼は「創造月刊」、「洪水」、「新消息」、「民衆」、「奔流」（魯迅と一緒に）、「大衆文芸」、「白樺」（錢杏邨と一緒に）等多くの文芸誌を作り、又中国済難会、中国自由運動大同盟、中国左翼作家連盟、上海文化界反帝抗日大連盟、中国民権保障同盟、杭州作家協会、中国文芸家協会、福州文化界救亡協会、中華全国文芸界抗敵協会、シンガポール南洋学会等の団体に入り、活躍し、最後が第二次世界大戦中の大活躍と続くのである。

郭沫若は中国文壇の三絶として、「魯迅の韜、聞一多の剛、郁達夫の『卑己自牧』（謙遜して、自らの徳を養う）」を挙げているが、²²⁾ 郁達夫は自分自身にこの上もなく忠実で、虚心坦懐に自分の信念・感情・欲望の赴くままに行動すると同時に、豪放磊落で、周りの人々にも温かく、思いやりがあり、情熱的で、民衆と苦楽を共にし、民衆のために闘い抜いた闘士である。

Ⅲ. 悲劇の主役

1. 悲劇の出生

郁達夫は1896年12月7日に、零落れた代々学者の中流家庭に三男一女の末っ子として生まれた。母親は乳不足で、家には食べるものもろくになかったので、彼は栄養不良で病気がちであった。3歳の時、父親は看病疲れから患いの床につき、亡くなってしまう。母親は家を背負って立つしかなく、僅かにあった先祖伝来の田畑の管理、小作米の取り立てから精米、販売まで全部女手一つでやり、ほとんど家にいなかった。歳が離れた二人の兄が学校の寮に入り、姉が未だ幼い子供なのに、将来の稼ぎ先に引き取られて行ってしまってから家に残るのは祖母と15、6歳になるお手伝いと3人だけであった。後に彼自身が言うように、正に彼は「悲劇の出生」であり、寡婦と孤児の家庭である。彼が性格的に憂鬱且つ神経質で、孤独を愛すと同時に寂しがり屋であるのはこの環境と大いに関係がある。

塾から小学校、そして中学校と、彼の成績は飛び級するほど常に優秀であった。聡明だけでなく、勉強家でもあった。宿題をやり終わってから読むのは史書、唐詩古文であったが、その内に「石頭記」、「第六才子書（西廂記）」、「西湖佳話」、「花月痕」、「滄浪詩話」、「白香詞譜」等の中国の古典文学を読むようになり、文学が好きになる。当時は辛亥革命の前夜で、「山雨来たらんと欲して風樓に満つ」雰囲気であった。彼は学校に不満で、絶望し、遂に行っていた先の杭州から故郷の富陽の実家に戻り、独学を始める。毎日英語の他に、「資治通鑑」や唐宋詩文諱、自然科学関係の本を読んだ。「この二年近くの独居生活は、私の一生にとってむしろもっとも収穫があ

り、もっとも影響の大きかった準備時代であった。」²³⁾と彼は述懐している。

彼は勉強の傍ら、何度か近郊の農村へ散歩がてら遊びに行ったことがある。農家の人と話し合ったり、見たりして、色々なことが分かって来る。年がら年中汗水垂らして働き、血の出るような思いをしても生活は一向によくなるどころか苦しくなる一方である。それに加えて、農民は種子を改良するとか、耕地収穫は逓減するものであるとか、荒地を開墾するとかというようなことを知らないばかりか折角手に入れた金の大部分を神仏詣りやその他の虚栄に使ってしまう。要するに、無知・愚昧なのである。地主・軍閥の搾取に内乱、外患、農村はもう破産に瀕している。後に彼は日本で「支那の現状に就いて」という題で講演し、特に中国の農村の話しをするほど、農村問題に詳しく、農民に関心を寄せていた。彼は毎日上海から送って来る新聞にも目を通し、辛亥革命という言わば台風の圏外にいながら、時局を見守り、憤激したり、勇壮な戦闘の夢を見たり、民衆や国のために力を尽くし、身を捧げる決意をしたりするのであった。

2. 日本留学

1913年9月、彼は長兄に連れられて日本に留学に行く。それから、1922年7月までのほぼ10年間日本に滞在する。先ず東京神田の正則学校、夜間学校から始まって、東京第一高等学校予科、名古屋第八高等学校を出て、最後に、東京帝国大学経済学部に入學し、1922年3月に卒業する。その間、彼はツルゲーネフの「初恋」、「新潮」から読み始め、トルストイ、ドストエフスキー、チューホフ、ゴーリキー等ロシアの作家の作品からドイツ、イギリス、フランス作家の小説、日本の佐藤春夫、葛西善蔵等近代文学及び「源氏物語」、近松門左衛門の作品まで、有名な作家のものだけでなく、新人作家のもの、名作に限らず、無名の作品まで、兎に角手当たり次第沢山読んだ。一高在学4年だけで、1000部も読み、東京帝国大学に入ってから読書の習慣は変わらなかった。郭沫若は次のように書いています。

「達夫は非常に頭が良く、英語・ドイツ語も大変上手だった。中国文学の造詣も深く、予科時代の時から既に素晴らしい律詩が作れた。我々はみな彼を天才だと思っていた。彼は欧米の文学、特に小説が好きで、我々仲間の中に彼ほど沢山読んでいるものはいなかった。」²⁴⁾

結局、郁達夫は医学でも経済学でもなく、文学の道へと進むことになる。

1921年6月、1年半の準備を経て、彼は郭沫若・田漢・成仿吾・張資平・鄭伯奇等と一緒に中国現代文学史上最初で、最も影響力のある二大文学団体の一つの創造社を発足させ、「創造季刊」を発行する。10月、「創造社叢書第二種」として、彼のデビュー作でもある小説集「沈淪」を刊行する。

郁達夫は16歳から25歳まで日本にいた訳であるが、この10年というのは誰にとっても人間形成の一番重要な時期であり、宇宙観・人生観・価値観・恋愛観、思想・道徳・性格・趣味は大抵この時期に決まる。彼が日本で、政治・経済・社会・文化等全ての面で大きな影響を受けたであろうことは想像に難くない。海が好きとか、高い山に登って遠くを眺めるのが好きとか、大自然を愛し、又世事を忘れ、独居するのが好きとか、そのような性格・趣味は半分は先天的なものであろうが、半分は日本で長年過ごしたせいであろうと、自分でも言っている。特に、「近代」或いは近代文学は彼を目覚めさせ、その目で祖国、そして自分自身を見るようになり、固陋な環境や

愚昧な人心に絶望から憎悪と転じて行き、それらを木っ端微塵に粉碎すべくロマンチズムへと突進して行ったのではなからうか。彼は大学での専攻の勉強が終わるのも待てずに、文学活動を始め、日本で書いた小説で中国文学革命の最前線に立つようになり、一躍有名になったのである。

直接の影響は何と言ってもやはり私小説からの影響である。郁達夫は大正年間に流行った日本の私小説をよく読んで高く評価していた。

「葛西善蔵の短編を二つ読んでみたが、相変わらずすばらしいものだ。ただただ感服。昨日の午後、街の古本屋で古雑誌を十冊仕入れて来た。小説が都合二、三十編掲載されているが、僕は葛西の作品がなんとといっても最高だと思う。」²⁶⁾

「『新潮』の新年号を買った。葛西善蔵の『酔狂者の独白』が載っているが、実にすばらしい作品だ。」²⁶⁾

「『追放』を午前二時すぎまでかかって一気に読了。読みおわって全体的に評価してみると、やはりこれは大作品だ。それなりの生命を持っている。なかほどで主人公が、帝国主義の圧迫のために革命の道に進まなければならぬところなどは感動的だ。」²⁷⁾

「『公論』五月号を買う。佐藤春夫の文芸時評が掲載されていて、なかなかよい。」²⁸⁾

「日本現代の作家の中で、私が最も敬服しているのは佐藤春夫である。……彼の一番の作品は言うまでもなく、彼のデビュー作の『病める薔薇』、即ち『田園の憂鬱』である。その他、『指紋』、『李太白』もみな類い無き優美な作品である。最近発表した『侘しすぎる』を私は未だ読んでいない。私の見るところでは、この『剪られた花』は或いはこのところの最大の収穫かも知れない。この小説の中の、主人公が失恋するところ等、もう言うことなく行き届き、完璧で、私はいつも真似したくて堪らないが、いくら頑張ってもうまく行かない。」²⁹⁾

「郁達夫は意識して私小説の体裁・技巧を取り入れており、全体的情緒・表現に頗る佐藤・葛西の影響を受けている。例えば、敏感で繊細な個人的な感觸、憂鬱煩悶の気分、微細な心の動き、心霊と肉体からの詩的な昇華等など、私小説の種々の特徴はちょうど郁達夫の創作の特色と一致している。最近、東欧・日本の一部の研究者が郁達夫を『中国の私小説作家』と呼んでいるのは、或る意味では全然納得できないことでもない。」³⁰⁾

勿論「郁達夫が私小説という器を借りて、それに中国の血肉、民族の心・精神及びその他芸術家の個性的な魂を盛り込んだ」ということも確かである。³¹⁾

3. 離散と裏切り

彼は帰国後、生活に追われて、北上したり、南下したり、西へ行くと思えば、東に戻るという、正に東奔西走の歳月を送り、創造社の仕事を仕切り、執筆を続けながら、大学の教壇には立つわ、北伐の前線を視察するわで悪戦苦闘するのであるが、結果的には恵まれなかった。『『日記九種』の後書き』に、彼は遂に「みんなの攻撃的になり、自分の全てを犠牲にただけでなく、最後には闇討ちに遭い、十何年にもなる昔からの友人とも刃で相向かうはめになる」と書いている。³²⁾ここで言っているのは創造社の仲間や部下とのことである。

郁達夫は郭沫若や成仿吾と一緒に創造社を作ったぐらい気が合い、仲が良かった。日本留学時

代は先輩、後輩の間柄で、三人の家柄或いは性格こそ違うものの、みな財物を軽しとし、義侠心に富み、そして、文学が大好きであった。受けた教育は普通の人よりずっと高いせいもあって、純朴で、世渡りが下手であった。偽善的で卑劣な手を使って、人の上に立つ、所謂時代の優勝者を心の底から憎み、情け容赦なく批判を続けた。人の恨みを買ひ、攻撃されたのは言うまでもない。それでも、彼らは怯まず闘い続け、あくまで芸術に忠実であると自負する、言わば戦友同士であった。

ところが、郭と成はマルクス主義の方向へ突き進み、左、左へと傾斜して行き、言論も益々過激になってしまった。「郭沫若から来信。『洪水』に載せた『広州事情』について、僕の傾向がひどく悪いと責めている。彼は右派に籠絡されているのではないだろうか。さきざき、われわれはべつべつの道をとることになるかもしれない。」³⁵⁾「仿吾から来信。沫若が彼のところへも手紙をやって、僕が『洪水』第二十五号に書いた『広州事情』を罵っているという。それを読み、また仿吾が書いた短文『「広州事情」を読む』を読んですこぶる不愉快になる。今は民衆にかわって物をいうべき時なのであって、軍閥官僚に付和したり、新軍閥や新官僚と権力闘争をしたりする時ではないと思う。」³⁶⁾と郁達夫が日記に書いているように、双方の考えには亀裂が生じ始めていたのである。これは郭沫若が後に言うように、当時はみな若かったとか、「彼は時には私よりもっと軽率で、何かやるにもよく考えず、興奮しやすい。それに、彼は往々にしてあまりにも自信がなく、私の見るところでは自暴自棄或いは軽はずみに近い」とかということではない。³⁵⁾

郁達夫は又創造社出版部にいる王独清・葉靈鳳や若い連中にも非常に不満であった。「某君が来て創造社出版部の整理について話して行く。とにかく今時の中国の若い者は、浅薄そのもので、どうにも信用できない。とても事をまかせられない。」³⁶⁾「葉某が来たので、口論してしまう。若い連中に対する失望の気持ちを、洗いざらいぶちまけてやる。」³⁷⁾「午後三時、創造社出版部に帰ったが、内部の事情はますます手がつけられなくなっている。」³⁸⁾「昼食後、出版部の整理計画を練るうち、おかしなことをいくつも発見する。」³⁹⁾「以前出版部で働いたことのある悪質な若者たちが、僕を陥れようとしているようだ。……現代の青年は実に陰險そのもので、中国の将来に対し寒心に耐えない。」⁴⁰⁾「ああ、僕がもしこのまま死ぬことになったら、去年創造社出版部内で策動し、僕を売った良心のない自称青年芸術家どもの銅像をこしらえて、僕の墓の前にひざまずかせてやらねばならぬ。」⁴¹⁾「夕方もどって来て、出版部の事務員たちがまた僕のことを中傷していた由を聞く。」⁴²⁾ 等等など、もう当時の日記には引っこりなしに彼と創造社との間の葛藤・紛糾が書かれている。

それで、遂に1927年8月に彼は創造社から脱退し、郭沫若と絶交する訳である。

五・三〇運動、北伐、特に中国共産党成立の前後に、マルクス主義が急速に中国に入って来て、知識人の間に広がり、左派・左翼が形成されつつあった。その内の一部は共産党に入党した。国共合作の時は身分を公にして活躍したが、1927年4月国民党右派の蒋介石が共産党員を肅清・弾圧し始めてから、彼らは鳴りを潜めるか地下活動をするようになっていた。文学界に於いて、彼らは中国の現実を無視し、教条的にマルクス主義を理解して、非常に過激な、場合によってはあくどいほど魯迅を始めとする良心的、或いは進歩的な文学者を攻撃した。郭沫若がその典型である。それに対し、郁達夫はマルクス主義に賛同し、急進的な論文や、社会主義色彩を帯びた小説

も書いたが、組織・行動的には郭沫若たちに同調せず、魯迅に近付いて行った。

「郁達夫という奴はもうとっくに死んだも同然だ。われわれは決して魯迅みたいに左翼作家の会合の席上で彼の頹廃は許せるというようなことを言ったりはしない。」⁴³⁾と郁達夫に対する攻撃はエスカレートする一方であった。

郁達夫は中国左翼作家連盟からも脱退する意向を表明する。連盟は魯迅の意見を無視して、彼を除名までする。これに対し、彼は次のように言っている。

「左翼作家連盟は、間違いなく、私もその発起人の一人である。然し、共産党の方では私に非常に不満で、私の作品は個人主義的なものだと言う。それは確かである。私はプチブル階級出身の人間であるので、どうしてもそうになってしまう。但し、社会というものは数多くの『個人』から成っているのではなからうか。もしも確かにそういうことであるならば、個人の生活を暴くということはこの社会のある一つの階級の生活を暴露することにもなるということ私は信じて止まない。……後に、共産党は私に具体的な仕事をやれと言って来た。私はピラ配りのような類のことはできないと断った。彼らは益々不満であった。だから、作家連盟は、むしろ私の方から自動的に自分の名前『郁達夫』をその名簿から外したのである。

プチブル階級出身の人間が具体的な仕事をやるのは容易なことではない。仮にいやいやながらやって行ったら、逆に大衆に迷惑をかけるだけである。それこそ『事を成し遂げる力はないくせに、事を失敗させる能力は充分にある』になってしまうだろう。プチブル階級の人間はおそらく教員か公務員の道を行くしかないようだ！」⁴⁴⁾

「私は戦士ではなく、只の作家に過ぎない。」⁴⁵⁾

4. 大恋愛の結末

郁達夫は1917年8月に、孫荃と婚約し、1920年7月に結婚し、後に男の子一人と、女の子二人を設けるが、それは3歳の時に両親が決めたもので、愛情も何もあったものではなかった。大きくなるにつれ、何とかして取り消そうとしたかったが、なかなかできず、日本に行ってから帰省をあまりせず、帰国も引き伸ばしていた。ところが、結局は母や祖母、相手の親の圧力に抵抗できず、一緒になった訳である。でも、結婚してから6年経つが、合わせて半年も同居しなかった。

1927年1月14日、彼が同郷人孫百剛の家を訪ねた時、偶然そこに居合わせた王映霞と会い、心をすっかりかき乱されてしまい、一目惚れしてしまうのである。その恋と云ったら、それはもうロミオのジュリエットに対するものより激しく、居ても立ってもいられない程のものであった。

「2カ月この方、私は何もかも全部忘れてしまいました。あなたのためになら、私は自分の家庭・名誉・地位、乃至命をも惜しくもなく捨てます。私のあなたに対する愛はそれ程強く、誠実なのです。私は何回もあなたに言いました。私は今までこのように人を愛したことがない。私の愛は条件なしで、全てを犠牲にすることができるものである。私の愛は電光烈火の如く、社会全体や自分自身を焼いてしまわないことにはいられないものであるということ。……私が最も重く見るのは熱烈な愛、盲目な愛であり、一切合財犠牲にできる愛、一刻たりとも待てない愛なのです。……私たちの歳はあまりにも離れすぎているので、片思いになりがちなのは当然のことと

言えば当然のことです。又、私ときたら、全然風采があがらない。これは私の一生恨んでも恨み切れないことですが、これではあなたの心を燃えさせることは不可能でしょう。そして、私にはそう力もなく、金持ちでもないし、世の中をあととさせるほどの名誉もない。要するに、あなたを陶醉させるものを何一つ持っておりません。……あなたを愛するからこそ、私はあなたの今の苦しみを取り除いて上げたいのです。その苦しみは私との心成らずの、仕方がない応酬や付き合いから来るものです。……もしも将来に於いて、私に一つでも何かできたとしたら、その榮譽は全部あなたのものです。」⁴⁶⁾

これは彼の彼女に宛てた何十通の手紙の中の一通の一部であるが、彼はこのように喜んで怒り、悲しんで楽しみ、兎に角悩み苦しんだ挙げ句、遂に1927年6月に、彼は王映霞と婚約し、翌年の1月に結婚する。それから正式に別れるまでの13年の間に、男の子三人を育て上げる。二人は始めは幸せに浸り、郁達夫が言うように、軍閥の陰謀を目にしたたり、友人・部下から裏切られたりして、出家か自殺かを考えるくらい沈んでいた時に、王と一緒にすることができ、「外から来た助けの力を得て、私の魂、私の肉体は全部救われ」⁴⁷⁾、仕事にも精が出て来た。

1933年4月、郁達夫一家は杭州に移住し、自分の家「風雨茅蘆」を持つようになるが、王映霞が国民党浙江省党部宣伝部長の許紹楙と急に接近し始めたこともあって、二人の仲は悪化する。1938年7月にその家庭内夫婦間のいざこざが公になり、収拾できなくなる。12月に、王映霞は息子の郁飛を連れて、シンガポールに行き、郁達夫と合流するが、二人とも雑誌に詩や文章を書いては激しく責める。1940年3月に、二人は協議離婚し、5月に王は帰国する。このようにして、郁達夫は最愛の妻からも裏切られる訳である。

5. 家破人亡

1937年、上海・南京が陥落した後、杭州・富陽も日本軍の手に落ちる。郁達夫の年老いた母が12月に飢え死にする。父の記憶がほとんどない彼にとって、母はかけがえのない存在であった。続けて、1938年11月に判事をやっていて、公明正大で有名な長兄郁曼陀が汪精衛政権によって暗殺される。父に代わって、父のように面倒を見てくれた兄であった。この大事な二人の死が彼に与えたショックは想像を絶するものであった。

1938年12月に、シンガポールに行ってから、彼は献身的に抗日救国宣伝活動に参加する。「星州日報」朝刊の「晨星」欄及び夕刊の「繁星」欄の編集長のポストに就く傍ら、「文芸」週刊誌、「教育」週刊誌、「星州半月刊・星州文芸」、「星光画報」文芸欄、「星檣日報」の隔週刊の編集にも参加し、寝食を忘れて献身的に働いた。1941年以降は英国当局情報部主催の「華僑週報」の編集長にも就任した。自ら多くの論文・時評・随筆・律詩等を書き、日本の軍事・政治・経済・社会・文化、その過去・現在・将来を分析し、中国と比較すると同時に、世界の情勢をも鳥瞰し、終始最後の勝利は絶対中国にあると言って海外在住の中国人を励まし続けた。又数多くの抗日民間団体のリーダーになり、海外在住の中国人に一致団結して、抗日救国闘争を支援するよう呼び掛けた。親兄弟を亡くし、一家が四散しながらも闘い続けたことは、彼は正に真の愛国者であり、民主主義の戦士であることを物語っている。

1941年12月、太平洋戦争が勃発し、戦火がマレー半島まで広がり、シンガポールが危急存亡之

秋に陥ったので、彼は胡愈之等と一緒に脱出し、最後はスマトラに移り、趙廉という仮名を使い、醸造会社等を経営しては隠れる。1942年5月、偶然日本の憲兵に日本語が堪能であることがばれて、無理矢理通訳をやらせられる。この間、彼は通訳の身分を利用し、政治とかには全然門外漢の振りをして、多くの愛国者や華僑・インドネシアの人を助け、又それで日本の憲兵の内部事情を目にしたのは言うまでもない。或いはそれが後の禍のもとになったのではとの推測もある。非常に残念で、情けないことであるが、彼は或る中国人の若者によって密告され、郁達夫であるということがばれてしまい、1945年8月29日の晩、連れ出され、それきり帰って来なくなるのである。鈴木正夫氏の調査（東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター『郁達夫資料——作品目録・参考資料目録及び年譜——』、1985年9月浙江省富陽県にて開催された郁達夫殉難40周年記念学術討論会に於ける講演・研究発表等）により、結局は日本の憲兵に殺害されたということが判明する。その2週間前の8月15日に日本は連合国側に無条件降伏し、彼は1937年から数えて8年もの長い間続いた戦争も勝利のうちに終わり、晴れて心より愛した祖国、風光明媚な浙江省の富陽の実家へ凱旋將軍として帰還できるというのに！

これが郁達夫の最後である。なんと非業な最期であろう！

IV. 愛憎交錯

1. 日本人は中国人蔑視

中華文明の発祥地、5千年の悠久な歴史、絢爛豪華たる文化、広大な国土、豊かな資源、億千万にも上る人口の大国の上にあぐらをかいていた中国人が自分の「中華」が19世紀半ば頃から20世紀にかけて、次から次と、欧米帝国主義諸列強に侵犯されるだけでなく、何と同じアジアの黄色人種の日本にまで戦争で大敗したことで、「夜郎自大」（身の程をわきまえず尊大ぶる）から一転して劣等感に陥ったことは想像に難くないし、憎悪の念に駆られるのも理解できる。「小日本」という言葉が中国人の口から消えないのがその証拠である。日本人に威張るといふ気持ちがさらさらなくてもそうなるのに、況して日本人ときたら又そう謙遜ではないのである。一部の中国人の僻み根性が増大するのも当然であると言えば当然である。中国人の日本観の根底にあるのがこのinferiority complexと悔しさ、恨み、憎しみである。この感情は恐らく中国が全ての面で日本を追い越さない限りなくならないであろう。人一倍繊細・敏感・感傷的な郁達夫が尚更悩み悲しみ、憤りを感じるのは無理もないことである。

彼が日本に留学に行つて間もなくの頃のことを描いた、前述の「沈淪」⁴⁶から拾ってみよう。

「『なんで日本なんぞへ来たのか。なんで学問なんぞにあこがれたのか。日本に来た以上、日本人に侮蔑されるのもやむをえないではないか。中国よ、お前はなぜ強くならないのか。おれはもうがまんできないぞ。』

故郷には美しい山河があったではないか。花も恥じらう乙女がいたではないか。それなのになぜ東海の島国なんぞへやって来たのだ。……」

「日本人は中国人をさげすんでいる。それはわれわれが豚や犬をさげすむのと同じだ。日本人はみな中国人を『支那人』と呼ぶ。この「支那人」なる三文字は、日本では、われわれが人を罵

るときの「賤賊」よりもさらに聴きづらいものだ。いま彼は花も恥じらう乙女の面前で『おれは支那人なのだ』と自認せざるをえぬはめになったのである。

『ああ、中国よ、お前はなぜ強くなってくれぬ』

彼は全身にふるえが起り、目にはまたも涙があふれんばかりになった。」

10年近く留学して、帰国する時の心情を書いた「帰航」⁴⁹⁾ から見てみよう。

「『ああ、日本よ！世界一級強国の日本よ！その国民はわれわれより小さいけれども、野心だけはわれわれより大きい日本よ！私が去った後も、お前の海辺は依然として風光明媚で、お前の子供は依然として憚ることなく酒色に溺れて行くであろう。この果てしない蒼穹、どこまでもつづく大海原は、恐らく私が去って行っても少しも変わることはないであろう。私の同胞の若者たちは恐らくやはり又お前のところに来て、私と同じ運命を辿り、お前から欺かれ侮辱されるであろう。然し、私の青春、私の、この無情の地上に費やされた青春よ！ああ、枯れて死んでしまった青春よ！お前は恐らく絶対もう二度と私のところには戻って来ないだろう！』

「10年もの長い間住んだこの東海の島国、私の芳香を放つハマナス酒のような青春を消耗したこの異郷の天地、私はその島国、天地からこの上になく犯し辱められたし、私はもう二度とそれに足の裏にキスしてもらいたくないが、私のこの厭悪の気持ちはあまりにも強く、この離別の時に来て、逆に訣別に忍びない気がして来た。ああ、この優しい心こそ、とこしえに変わらざる悲しみの種であり、人生の悲劇は恐らくみなこの種から芽を出すのではなからうか。」

これこそ郁達夫の日本観のポイントである。日本が憎い、物凄く憎い。但し、憎めば憎む程、日本から離れたたくても離れなくなる。何かあったら、最後の心の拠り所は日本である。ということは、その心の奥底に、或いは片隅に日本に対する熱い熱い愛情が潜んでおり、愛憎が交錯し、二重の構造、二重の表現になっている、と言えるのではなからうか。彼のこの愛憎交錯する日本観が彼のその後の一生の言動を決定し、又それが故に彼は悲劇の最期を遂げるのである。

「日本は私の最も嫌悪とする土地で、私は恐らく今後もう二度と来ないであろう。」

「『日本よ、日本！私はもう行ってしまおうぞ。死んでも二度とお前の元にはもう戻って来ないぞ。然し、私が、故国社会から抑圧を受けて、致し方なく自殺せざるをえない時、最後に私の目の前に浮かんで来るのは、或いはお前というこの島国かも知れない！Ave Japon！私のこれから行く道は真っ暗闇に包まれている！』」

帰国してから15年近く経った1936年1月の末日に書いた「雪の夜—自伝の一章」⁵⁰⁾ を見てみよう。1936年1月というのは、その4年半前に満州事変、4年前に上海第一次事変が起こり、支那事変が勃発する1年半前の時点で、日本軍の勢力が満州から華北へと伸びて来ている時である。

「知識のある上流階級・中流階級に属する日本国民は、中国人留学生をもともとどうまく丸め込もうとしている。然し、バラにトゲ、うわべは温和でも内心は陰険で、われわれのような、劣等感を強く感じ、神経過敏な若者が現当局の政治家みたいに虚心坦懐でいられるはずがない。ところが、国民の圧倒的な多数を占める、知識のない中流階級・底辺にいる大和民族に至っては、もう正直そのもので、その態度・言葉遣い・振る舞い等体全体ではっきりとこう罵っている。『貴様等、劣等民族、国滅ぼしの卑しい人種の奴等め！貴様等の主人である、この大日本帝国に何し

に来たのだ！』

東京市内の小石川区の植物園や郊外の武蔵野にある井の頭公園へ行けば、必ず花を摘んだり、歌を歌ったりしている少女たちに会える。声をかけると、喜んで対応してくれる。だべりながら実に夢のような楽しい一日が過ごせる。ところが、それが歓楽の絶頂から急転直下して奈落の底に落ちる場合がある。「これらの無邪気な少女たち、絶対男に従うという麗質を備えている彼女たち、彼女たちはもともと父兄の薫陶を受けて育って来ているのだ。弱国の支那という二文字を一旦耳にしたら、平然とした落ち着きを保っていられるはずがない、人に対する好感を持ち続けるはずがない。東隣の日本民族、とりわけ妙齡の少女の口から吐き出される支那或いは支那人という名詞を聞くと忽ち全身に鳥肌が立ち、侮辱・絶望・悲憤・苦痛の状態になる。こういうことは、日本に行ったことがない中国の我が同胞たちには絶対に想像できないことである。」

郁達夫は若き頃の呻吟・絶叫の「中国よ、お前はなぜ強くならないのか」から徐々に眼光を鋭くし、中国人の醜悪な体質を批判するようになる。

「日本に来て始めて、私は世界の競争の場で我が中国がどこに置かれているかがはっきりと見えて来たし、形而上といい、形而下といい、兎に角近代科学の偉大さや奥深さが分かって来た。日本に来て間もなく、私は我が中国のこれからの運命、4億5千万の我が同胞が受けざるをえない煉獄の長い苦しみをこの肌で感じた。」⁵¹⁾

「中国の国民性はとっくに三千年来の道徳・虚偽により腐り切ってしまっている。……この三千年来の亡霊が遺した鉄の鎖というのはつまり現代の普通の若者の心に巣くっている利己的な発想、役人になり、金持ちになりたいという野望、汚い手、卑劣な手段でチャンスを掴むのに長けている手口、人を押し退けてまでして、人の上に立とうとする野心、甚だしいことに至っては、大義名分を利用して私利私欲を満たそうとするやり口、自分の名誉のために公共事業を流用するやり方、その他種々様々な巧みな、一見何事もないような、われわれの想像を超えるような、卑劣極まりない陰謀術策である。……中国の人心は既に死んでしまっている。」⁵²⁾

2. 日本人が好き

郁達夫の人を見る目は全体から言うと、マルクス主義・階級論・共産党的ではなく、民主主義・ヒューマンイズム・個人主義的であり、理性的ではなく、感情的である。人に追随するとか、組織の決定によってではなく、自分自身の判断に基づいて決める。それが故に、好きとなったら、相手の国籍・階級・身分・職業等と関係なく、とことん付き合い、その人のためなら、金銭・名誉どころか命まで捨てられるし、嫌いとなったら、どんな理屈を捏ねても顔も合わせないし、口も利かない。要するに、彼の友人に対する態度には人間味があり、誠実で、温かく、情熱的であった。それが故に、彼の交際範囲は非常に広く、中国だけでなく、日本も多いし、文人・学者・文学者・画家・芸能人に限らず、政治家・官吏・外交官・軍人・財界人もいる。左寄りの人もいれば、右寄りの人もいた。超一流の著名人もいたし、無名の庶民、農民・学生も少なくなかった。よく一緒に食事をし、酒を飲んだ。話が弾み、深入りするケースが多かった。そういう彼は特に日本人が好きであり、日本人を心から愛した。

彼はこう言っている。

「小さい時から、敵国で教育を受け、10何年も滞在しているので、自ずと日本の友人は少なくない。帰国してからも、福州・上海・杭州等に住み、ぶらぶらしている間に、敵国の官吏・軍人及び文人・学者が遊びに来た時は大抵私に会い、話をする。他はここで触れないことにして、今回両国交戦中の多くの将軍だけでも、例えば松井石根、長谷川、阿部等、彼らが中国に来た時は必ず私に会いに来るし、私が日本に行く時もよく彼らと会うのである。」⁵³⁾

1936年2月2日に郁達夫は福建省政府主席陳儀の招請で福州に遊びに行くが、その前後から3月31日までの日記⁵⁴⁾を見ればその交友が分かる。蒋介石委員長・陳儀主席・薩鎮氷上将を始め、省局長・首席参議・市長・県長・裁判所判事・銀行頭取・会社社長・新聞社社長・通信社社長・学長・校長・病院長・船長など、各階層・各分野に亘り、毎日のように誰かと会っているし、多い時は一日に30人以上である。そして、又宴会が連日の如く続く。2カ月の間に講演を5回もし、2月15日の「中国新文学の展望」という題での講演会など、聴衆は千人以上である。その間、2月12日は日本の総領事・陸軍駐在武官・商船会社支社長・新聞社社長と飲み、泥酔している。2月18日、日本の別の武官と会い、又新聞社社長と酔っ払うまで飲んでいる。2月22日、その新聞社社長と再度飲む。2月29日、各国領事と食事。3月5日、日本人倶楽部に行き、松井石根大将に会い、話をする。3月6日は薩鎮氷上将等と一緒に松井石根大将を招いて食事をする。

胡愈之は「郁達夫の放浪と失踪」⁵⁵⁾の中で感想として次のように指摘している。

「達夫は何時も、彼は日本人を理解している、日本人の本質はそう悪くない、と言っていた。……彼は国を愛し、同胞を愛したのは言うまでもないが、人類をも愛した。彼は人の本性はもともと善であるということ堅く信じていた。彼はそれを信じていたがために犠牲になってしまったと言えるであろう。何故かと言うと、彼がもしも早くから日本人が降伏してからもやはり彼を殺すかも知れないということが分かっていたら、死ぬことにはならなかったはずである。」

王任叔も回想録で、胡愈之から聞いた話として、こう述べている。

「日本に十何年も住んだ達夫が日本民族に多かれ少なかれ好感を持つのは理解できないことでもない。達夫が政治を語る時は何時も中国政府の汚職ぶりや腐敗と日本政治の光明正大、合理的なところと比べていた。だから、ある人は彼のことをこう言っていた。彼は感情的には祖国を愛しているけれども、理性的にはむしろ日本に近い方だ、と。それ故に、彼個人としては、日本人と和解することが可能なのだ。彼は全体から言うと、日本人が好きなのだ。」⁵⁶⁾

1936年12月18日に、郁達夫は奈良へ赴き、志賀直哉を訪ね、サンドイッチや梨を食べ、紅茶を飲みながら、2時間も楽しく話し合った後、見送りの道でばったり会った住職の案内で、二人は東大寺を見て回っている。その日の夜、彼は王映霞宛てに出した手紙⁵⁷⁾に次のように書いている。

「彼の作品は非常に少ないけれども、文字や表現は並はずれて精練されている。日本文壇に於ける地位は正に中国文壇での魯迅と同じである。」

「夜の帳が降りて来る薄暗い中で、彼に頭を下げ、別れを告げるその瞬間、私は感激の余り、バスから又飛び降りて、彼を家まで送ろうとしたくらいである。もしも十何年も前の若い頃であつたら、こういう時はきっと幾筋かの感傷的な清らかな涙をこぼしたに違いないであろう。志賀氏の真心、人に対する誠実さには感激せざるをえない。私は日本を離れるというその前の日に、

まさかこのような全人格を具え持つ大芸術家に会えるとは本当に思いも寄らなかった。彼は日本で一番寡作な小説家であるが、寡作寡作と言っても、一つ一つみな珠玉である。]

郁達夫の志賀直哉への礼賛と感激は又日本の古代文化への絶賛と感動と渾然一体となっている。同じ手紙の中に志賀氏に会う前の気持ちとして、彼はこう書いている。

「昨日京都に着きました。京都は日本の明治維新以前からの古都で、私が八高の時代に何回も来たことがある旧遊の地です。20何年ぶりに又来れて本当に嬉しいのです。……五重の塔、袖口が広く、中の虹のような綾模様が見える少女の着物、日本人が『雪洞』と呼んでいるあの漏斗のような龕灯、これら日本固有の美は……今朝は早く起きて、バスで法隆寺へ行きました。日本の聖徳太子の道場だったところで、昔の物が多いといったら、まるで北京の昔の博物館に入ったみたいでした。木造のあの金堂など、もう千何百年も前のものなのに、頑丈そのもので、今でも新築のように見えます。五重の塔、仁王門、並びに東院の夢殿、講堂等など、古色蒼然としていて、何処を見ても尊敬の念に打たれます。]

1927年7月12日、佐藤春夫夫妻と佐藤春夫の姪の3人が上海に来る。それからというもの、郁達夫は毎日彼らと付き合う。それを彼の「厭炎日記」⁵⁰⁾から少し拾ってみよう。先ず、佐藤夫妻一行が着いたその日の夜、一晚遊ぶ。15日午後、佐藤等が宿泊の旅館に行ってみるが、外出中で会えず。16日、佐藤を食事に招待することで、胡適之と打ち合せ。17日、「上海毎日新聞」記者から翌日日本人倶楽部での佐藤・郁の歓迎晩餐会に出るよう招請される。18日、その晩餐会。六三亭で二次会、深夜2時まで飲む。19日、

「午後は佐藤春夫とその夫人・妹を城隍廟・半淞園に案内し、茶店でゆっくり話したりして、六時すぎにいっしょに彼らの旅館に帰った。バスを使い夕食をすませたところへ日本人が二人、佐藤を訪ねて来たので、一同、六三花園へ行き、芸者をあげて飲んだ。月が東の林から上り、六三花園の二階から眺めると、ほの白い空に金色の光が一条キラリと輝いて見えた。あたりの木々の梢はびくりともせず、夜もふけて人影もなく、一面の暗闇で、海上に浮かぶ舟に乗っているようであった。芸者たちと簾を巻き上げて月を眺め、中天の天の川で手を洗い、襟をくつろげて夜半の涼風を迎え入れるのも、なかなか風情があった。東京の作家菊地寛たちに寄せ書の葉書をつくり、十二時すぎに自動車を出た。]

郁達夫はもう身も心も日本人そのものであり、日本人とここまで打ち解けて付き合った中国人は恐らくいないであろう。もう少し見てみよう。20日、佐藤等とフランス租界に行き、炎天下をあちこち案内して歩く。1時、佐藤夫人等を案内して、先施・永安公司というデパートへ買物に行き、福祿寿で氷を食べながら、夕方まで話し合う。旅館に戻って休憩した後、又佐藤たちとドライブ。8時、功德林という料亭に連れて行き、胡適之・歐陽予倩・徐志摩・陳通伯たちと一緒に夜中まで飲み歌い、胸襟を開いて語り合う。12時過ぎ、天蟾舞台の楽屋に行き、役者の化粧するところを見て、旅館まで送る。21日、佐藤のところへ顔を出す。22日、夜佐藤のところへ行き、彼等と深夜まで歩き回る。23日、午前、佐藤と一緒に田漢を訪ねる。昼食をした後、午後は佐藤夫人たちをも誘い、買物、夜は御馳走する。散歩した後、旅館まで送る。24日から27日まで、ほとんど付きっきりで佐藤等一行を杭州へ案内し、西湖や靈隱寺・清澗寺・紫雲洞・岳飛廟・六和塔等名所旧跡を回り、知味觀・杏花村・樓外樓というような杭州一流の料亭で食事をする。汽車

で上海から杭州へ向かう時の出来事であるが、郁達夫は日本人である佐藤等と一緒に次の場面を見、考えるのである。

「途中は軍人が南京虫のようにうじゃうじゃしている。列車の座席もこの連中で占領されている。いま僕は中国軍隊は南京虫のようだといったが、けっして彼らを罵ったわけではない。実をいえばこの喩えではまだ甘すぎる。というのは、南京虫は人の血を吸うだけで直接人を殺すことはできないが、軍人は中華民族を滅亡に導く危険すら持っているからだ。この軍人は新旧の軍人を問わない。国民革命軍の軍人も、同様に腐敗しており、同様に悪辣だからだ。軍人を根絶やしにすること以外に、中国を救う薬はない。」

正に彼の人間観を示す大事な例である。又、日記を続けて見てみよう。27日上海に着いた一行はそのまま旅館に戻り、夜まで話し込む。28日、南京へ行く佐藤を駅まで見送る。29日、佐藤夫と姪を大世界に案内する。30日、夕方佐藤夫人のところで話し合う。夜は夫人と姪を映画に案内する。旅館まで送った時は既に11時半になっていた。31日、夕方佐藤夫人等を城隍廟に案内する。というふうに、至れり尽くせりの接待であり、郁達夫の人柄もこれでよく分かるし、彼が日本人と気が合い、日本人が非常に好きであることも一目瞭然である。

ところが、その同じ佐藤春夫が10年後に「風雲」という小説を書き、明らかに郁達夫をモデルにした鄭という男を登場させる。鄭はその大の友人である汪という、これ又郭沫若をモデルにした男の北伐時代の愛人を分捕り、自分の妾にしてしまう。汪は友と愛妾に裏切られ、結局は目覚めて日本人のために働き出すというストーリーである。そして、全編が日本謳歌・皇軍礼賛・戦争正当化に染まっているだけでなく、随所に日本人べた褒め、中国人蔑視の表現が出て来るのである。例えば、「支那人というのが玉に瑕という者があると、支那人でさえなければ教授連が令嬢達の婿に選ぶに決まっているから、なかか看護婦までお鉢がまわって来ないだろうという騒ぎであった」、「日本人の盛んな愛国心の感化を受けて、わしにも支那人としての愛国心が起こったのだ」、「日本人は自国に安住する限りの人間ならたとい敵国の民でも保護することをする民族である」、「隣国でありながら宿命的に仲の悪い日支両国人」、「それが旧友の妾になっている。こんな事は日本の娼婦も取えてせぬところである」、「皇軍の北支の戦線は着々と成功し、上海の戦線も徐ろに有利に展開、杭州湾の敵前上陸の大成功」、「日本人は真実をさえ話したならば昨日の抗日の急先鋒が今日親日家である転向をすぐ承認する種族である」、「北支開発の民意の現われ」、「日本文化もこの土地を一時に吹きなびけるに相違ない」等等、枚挙にいとまがない。郁達夫がこれを読んでかんかんに怒り、「日本の娼婦と文士」⁵⁰を書くのである。

「佐藤は日本ではもともと中国の純朴な人たちの頭を売って飯を食っている奴である。普段は中国人は斯く斯く然々素晴らしいとか、中国の芸術は斯様斯様に進歩しているとかと最大の賛辞を惜しまないし、われわれ個人との友情もそう悪くはない方なのに、突然変身し、現在のような軍閥に媚びて付和する姿勢を取るようになるとは！彼の今までの言うこと為すこととは正反対ではないか。……佐藤は普段は孤高を装い、中国の友と自ら任じている。彼がこの度その仮面を剥がしたことは娼婦の行為と匹敵するものである。私が言っているのは最も下劣な娼婦である。勿論李香君、小鳳仙のような義侠の振る舞いとは比べものにならない。……日本の年配の大家の中で、例えば秋田雨雀・志賀直哉・島崎藤村のような人たちはやはり良心が眩んでいない人たちで

ある。中堅の作家で、例えば鹿地亘及びその他の戦争に賛成しない作家たちは、それこそ強い正義感を持つ文士である。われわれは軍閥の飼犬文士を尻尾を振る或いは狂言を吐く老いぼれの犬に対するように軽蔑し、本当に世界的な視野と眼光を持ち、文人の気骨のある作家には心からの敬意を表する次第である。国籍・人種とは関係なしに。」

彼は第一に愛国者である。第二に「朋友の信」を座右の銘とするくらい友人に義理堅い気性である。第三に金銭には疎いが、名誉は重んじる性格である。いくら日本人が好きでも、いくら曾て師と仰ぎ、又友人として親しく付き合っていたとしても怒らないはずがない。むしろ怒らない方が不自然であるし、許せなかったのである。

3. 日本文化を絶賛

筆者は中国に共産党政権ができる寸前の1948年から1993年までの45年間中国で暮らしたが、一般の中国人のこの45年の間の日本への関心と言えば、軍国主義の復活、国交正常化に伴う日本語の勉強ブーム、日本の家電製品追求、日本への留学・出稼ぎの四つぐらいである。中国の共産党・政府は言うまでもなく、日本研究者も、日本への唯一の窓口である、郭沫若を名誉会長とする中日友好協会も、一般の国民に届くような日本文化の紹介はしたことがなかったし、日本文化を誉めるなどとてもないという感じであった。中国人で日本文化を高く評価したのは台湾の李登輝前総統ぐらいである。中国大陸は「友好」を口にしながらも、何とかして金や技術・ノウハウを取ろうとするだけで、実際は冷たい。台湾は「親善」そのもので、感謝の気持ちが見え、温かい。

日中両国の国民感情が冷え切っている今こそ相手の長所・美点をよく見、自分の短所・欠点と照り合わせて反省すべきである。その意味でも郁達夫が65年前に書いた「日本の文化生活」⁹⁾は最適の教科書である。

文化の基本は人間の衣食住の生活であるが、郁達夫は自分自身の日本留学の体験に基づき、日本に来て最初は、あまりにも簡素で不便を感じ、悩んだ。ところが、そのうちにだんだんと慣れて来て、安心するようになった。物質的な苦痛を忘れ、精神的に励み出し、勉強や仕事に専念するようになった。そして最後は、逆に島国の簡単な食事が恋しくなり、質素な生活、美しい景色、澁刺、生き生きした姿、整然とした秩序等は蓬莱島の仙境を彷彿させるようになった、と述懐し、次のように指摘する。

「日本の一般の国民の生活がこのように質素であるからこそ、上から下まで、民衆は発奮し頑張るのである。明治維新から未だ七、八十年くらいしか経っていないのに、国全体の進歩といったら、もう千年以上の文化を持つ英・仏・独・伊諸国と比べることができる程である。憂患に生きるか逸楽に死ぬか、これが中日両国の一つは榮え、一つは衰える病原の診断である。」

日本人は勤勉で、よく働く。儉約で、質素である。だからといって、楽しむことを知らないのかというと、決してそうではない。只、その楽しみ方、レジャーの仕方が違うのである。

「彼等の享楽、彼等の余暇は、大事な点で差し障りがなければそれでよしとし、見栄を張ったり、浪費をしたりはしない。淡泊の中に奇しい趣きを求め、簡易の中に深意を寓す。春は花、秋は月、近くの川、遠くの山、自然を大いに活用するのが少なくない。これは日本は美しい山や川

が多い。恵まれた自然環境にあるということもあるが、主にやはり彼等の島国民族の天性によるものであると言えるであろう。」

文学と言えば、最も精粹で、最も特殊な古代文学は、言うまでもなく、31文字からなる和歌である。

「男女の恋情や女を思い、男を怨む恋慕、家・国の興亡や人生の流転、世事の無情や自然の魅力を題材とし、それも飾り気のない、極僅かの句で古今乾坤の一切の感情を一つ漏らさず纏め上げる。後に興って来た俳句は、専ら情感・音韻を長所とし、字句は17文字しかないが、その余韻・余情といったら、空中の柳の揺れるが如く、池の微かな小波の如く、どこから始まり、どこで終わるのかも分からないくらい飄々として、現われては消え、消えては現われ、ななよなよとしている。短い短い句であるが、まるでカンランの実のように、噛めば噛む程、時が経つにつれ、味が出て来る。」

舞踊、邦楽と言えば、能楽・歌舞伎・浄瑠璃があるが、楽器は琴・三味線・鼓、簡素そのもので、動作も複雑でない。ところが、能楽でも、歌舞伎、浄瑠璃でも、クライマックスに近付いて来ると、耳にはいとも単調な音しか入って来ず、目に見えるのも単純な仕草だけだけれども、なぜか体全体がそこに吸い寄せられ、無我夢中になってしまう。正に、単純で以て長所とし、淡泊で以て勝を制すといったところである。

妓楼の端唄・小唄・清歌、三味線・鼓の伴奏での哀調が醸し出す悲しくて寂しい情緒は日本独特のもので、日本でしか味わえない。

琵琶の伴奏での唄や尺八も男の悲壮激昂や女の思慕・怨念の心境を表現するのに適している。日本人は野外で遊ぶのがとても好きである。京都の嵐山・丸山、東京の飛鳥山・上野、吉野での花見、祇園の夜桜、そして都踊り、老若男女、一家総出で、唄ったり、躍ったり、食べたり、飲んだりして楽しむ。その外に、潮干狩りもあれば、螢狩りもある。お正月の門松、雛祭り、鯉のぼり、盆踊り等など、もともと中国の年中行事が、日本に渡ってからは国民の祝祭日になり、大変賑わう。

日本人の庭園、築山、小池、灯籠、植木、盆栽等も精巧簡潔にできており、単純の中に趣味が現われている。それから家のお手洗いも、窓や戸を綺麗にし、手水場の傍に何本かの南天を植えたりして、便所の汚い臭いイメージを消している。

茶道といい、華道といい、どれ一つ取っても、みな素晴らしい文化である。

和服は、男性が着たらそう立派には見えないけれども、女性が着ると、それはもうこの上になく華やかで綺麗である。「蝶々夫人」がヨーロッパで大変受け、今だに衰えを見せないのは着物とも関係がある。

日本の国民は綺麗好きである。美徳と言える。誰でも一日に一回は風呂に入る。温泉があるところは勿論便利であるが、温泉がなくても家で風呂を沸かして入るか、銭湯に行く。一日働いた後、風呂に入るのをみんな楽しみにしている。

他にも、海辺での避暑、山での避寒、名所旧跡・公園の漫遊、日本アルプスや富士山の登山、相撲等など、日本の文化的な生活は実に豊富多彩である。

以上は日本固有の生活様式であるが、ヨーロッパの文明・文化が入って来るようになってから

は、都市部はモダンになり、ダンスホール・ナイトクラブ・音楽ホール・映画館が林立し、男女も洋服を着るようになり、銀座商店街の屋号まで洋風になって来た。でも、日本古来の独特の文化も残し、大事にしている。

兎に角、日本人は頑張り屋で、教養がある。上品で優雅、質素で充実した生活を送っているというのが郁達夫の日本人論である。

4. 戦争は軍閥の責任

郁達夫は1936年2月18日の日記に「酒を飲み、酔っ払って、口を滑らせ、日本人は侵略すべきでない」と面と向かって怒鳴ってしまう。或いは国際的なマナーには合わないかもしれない。今後は酒を飲まないようにしましょう。」⁶¹⁾と付け、自分を戒めているが、その時点で彼は既に満州事変や上海第一次事変を日本の侵略行為だと見ていたということが分かる。

1937年1月4日の「大阪毎日新聞」に発表した「日本の朝野よ支那を見直せ」という日本語で書いた論文で、彼は日本は中国を再認識する必要があると訴え、次のように指摘している。

「出先官憲の人々、永年中国内地に放浪していた壮士たち、彼等は大抵中国人を罵倒し、中国を日本人に与えた天の賜物としか心得ていない。中国の軍は悉く匪軍、中国の民衆はまた烏合の衆であると彼等はいう。中国人は合作の精神、国家の観念を全然持たず、みな我利我利亡者でこれを大国民として遇すれば却って侮られると、こういうふうな見方をする日本の論客はいわゆる一を知って、その二を知らないもので、中国ならびに中国民族をあまりに低く評価しているのである。これに反して、ごく少数の学者、文人および真の中国を愛している人々は、また中国および中国民族を大いに誇張して、褒めたたえすぎる。その結果は末恐ろしく感ぜしむることになるのである。過ぎたるはなおおよぼざるが如しで、この両派の論断はひとしく日本の中国に対する政策を誤謬に導くのではないかと思う。」

日本は防共、居留民の生命財産の保護を口実にして、満州国を作り、華北・華南に陸海軍を派遣している。「中国本部における日本駐屯軍の増員は、徒に中国人の猜疑心を刺激し、対日悪感を増長させるものであって、日本大陸政策の侵略は、中国全部を併呑せずんば止まずとの危懼を中国人間に起こさず役に立つだけのことである。不脅威、不侵略の政策は事実証拠立てて見せなければ、中国人民はこれを信じようとしても信じ切れないのである。」

「もし日本が軍事的侵略をやめ、好意的に中国政府の統一に助力し、中国の内政に容喙干渉せず、互惠平等の原則のもとに経済合作を計って行くとせば、中国共産党はまず成長する機会が少なくなるであろう。」

「経済提携に次いで、両国の親善を促進するに最も有効なる方法として僕は文化の溝通を力説したい。」

彼の念願は叶わず、「7月7日夜、蘆溝橋での日本軍の襲撃及び8月13日朝、上海日本海軍陸戦隊の我が保安隊に対する砲撃により、四億人の何十年以来積もりに積もった恨み・怒りは遂に爆発し、直ちに我が中華民族全面的抗戦の悲壯劇の幕は切って落とされた。」⁶²⁾

郁達夫は中国は満州事変からそれまで日本の侵略に抵抗しなかったが、支那事変、上海第二次事変を契機として、全面的な抗戦が始まったと見ているだけでなく、この戦争の責任は軍閥にあ

ると指摘する。

「日本の中国に対する侵略戦争は正に少数の軍閥及び財閥の野心により起こったものである。……軍閥の日本国内に於ける愚民的な宣伝は完全に民衆を騙すものである。……戦争は中国の国土で行なわれており、中国民衆の抵抗は全く止むを得ないものである。……中国の民衆は一人残らず最後まで戦う決心をした。日本の軍閥が悟らなければ、この戦争は恐らく二年三年と続いて行くであろう。我々が抵抗しているのは軍閥の野心であって、日本の民衆ではない。」⁶⁴

戦争が彼の日本観に与えた影響も非常に大きい。それまでどちらかと言うと、感情的であったが、戦争を契機に理性的の方に傾き、一段と冷静に日本・日本人を見るようになった。勿論、「抗日救亡」運動に従事するようになり、私的な感情を極力抑えるという側面もないとは言えない。

5. 軍部が全て

日本とはどんな国で、日本人とはどんな人種なのか、そして、その日本人の価値観とはどんな価値観なのか、という日本観・日本人論の根本的な問題に就いて、郁達夫は「日本思想の中心」⁶⁵という論文で簡潔に論じている。

天皇も軍部も国民もみな神である。日本の最も正統な創始者は神武天皇である。日本の紀元はそこから始まる。神武天皇は軍神である。それ故に、実際に全土を統一し、国を作った軍部が自ずと直系になる。歴代の天皇は神の名目上の代表に過ぎなく、軍部の支配を受ける。日本に年号があり、それは在位の天皇の名になっているけれども、実際統治しているのは軍部である。歴史を見れば一目瞭然である。自分の弟の甘美内宿禰に讒された武内宿禰から始まり、蘇我・物部・藤原・源氏・平氏・足利氏・織田・豊臣・徳川等みな軍部の代表者である。天皇には権限がなく、明治維新前の光明天皇もそうで、現在の昭和天皇も同じである。要するに、軍部が全てであって、天皇は御用「品」に過ぎず、軍部が神の直系であり、一番大きな役割を果たしているのである。

何故日本人或いは大和民族、日本民族はみな神或いは神の子とするのかということ、それは日本民族はもともと雑種で、その血には蝦夷・マラヤ・蒙古・朝鮮民族等の血が交ざっており、それらの民族はみな劣等民族と見られている民族なので、自分の先祖にはしたくなく、神を持って来た訳である。

いずれにせよ、国全体、政治でも、社会・法制・日常生活・宗教・道徳・男女の問題等、どの分野に於いても、その根底にあるのがこの日本イコール軍部、軍部イコール神という伝統的な思想・理論である。これに反する理論・考え・言論・行動・組織・団体は許されない。

軍部が絶大なる権力を握る簡単な例として、先ず軍人の刀試しがある。武士にとって刀は命、魂である。その刀が切れるかどうか試したくなったら、どこかへ行って、人を切ってみればいいのである。二・二六事件の時は閣僚を切った。1937年南京陥落の時、二人の軍人が中国の女性や子供を日本刀で切り殺す試合をやった。次に、軍人にはどの階級・階層或いはどの国の女性でも強姦する天賦の権限が与えられている。それで、日本の女性はパンツを穿くのを禁じられているのである。歴史上、どの時代にも軍人が宮内内の女性を汚す記載があり、今現在、中国国内でも多くの女性が日本軍人に暴行されている。

日本人の価値観の中心になるのがこの軍部が全てという発想である。これさえあればもう十分で、他は要らない、と言うよりも持つてはいけないのである。このような考えが大した変化もなく、3千年も続いて来た。それが故に、日本人の頭は世界一簡単・頑固になり、ものの考え方が非常に保守的・荒唐無稽になってしまったのである。

総じて、日本には天皇もなければ、国民も国家・法律・思想も、近代文化が生み出した全てのものが一切合財ない。あるのは唯軍部並びに軍部下にある毒蛇狂犬のみである。

無論天皇といい、国民といい、このような状態に甘んじていた訳ではない。明治維新により、日本は何百年の間に曾てなかった「最盛期の絶頂」⁶⁶⁾を迎えた。郁達夫はそれを「日本の議会政治」⁶⁷⁾という論文で詳しく分析している。明治天皇には政治が軌道に乗るか否かによって、国・民族・日本の集団が存在できるかどうかが決まることが分かっていた。何とかして、憲政・議会政治の基礎を固めようと努力した。彼は先ず、貪婪な軍閥の特権を取り消し、次に武士階級の横行跋扈を極力抑え、第三に、国民の権利と義務を決めた。これがつまり法治の精神で、憲政の要諦であり、議会政治の由来である。全国、上から下まで、国民一人一人みな法を守り、法に従うようになったので、国は強くなり、国民の生活は豊かになった。だからこそ、日清・日露の戦争に勝つことができたのである。ところが、その憲政・議会政治が1936年の二・二六事件から危うくなり、遂に1937年の支那事変、全面的な戦争に突入することによって完全に崩壊し、軍閥の摂政、関白或いは幕府制が復活したのである。

この論文を発表する6年前に、郁達夫は「法治から武治に移動しつつある日本」⁶⁸⁾という短文で早くも警告を発している。日本の政治舞台はもともと武士・軍人が権力闘争をする場であり、幕府の将軍でも摂政関白でもみな凶暴な軍閥であった。日本の歴史が始まってからのこの2千5百年の間に、神功皇后、聖徳太子等何人かの傑出した人が皇位を利用して、何かやった他に、日本人が万世一系と誇る皇室皇族が政治の上でその威力を発揮したことがあったであろうか。百年前に黒船が来て、外人の鉄砲に脅かされて始めて、吃驚仰天し、尊皇攘夷、大政奉還を叫び出したのである。明治維新以降暫くの間、軍閥は鳴りを潜めていた。それで日本全体が欧米並みの先進国になれたのである。ところが、議会政治がそろそろ疲弊を感じ、貧富の差が広がり、政治家の無能に世界の新しい流れの刺激で不安不穏の空気が流れ出して来た。軍閥がその隙に乗じて又台頭し始めたのである。暗殺の横行、国本社の活動、共産党の検挙、南満州への出兵がその証拠である。今日本は十字路に来ている。政治から軍部が支配する武治の前夜である。

政治家でも歴史学者でもない郁達夫が彼特有の敏感な感覚と鋭い眼力で日本史を鳥瞰し、現状を分析した上で日本の危機を予告した訳であるが、後に問題になる戦争の責任に就いても、天皇には直接の関係はないと言っているのである。正に卓見である。

外国人が日本を見る時、一番不可解に思うのは何であろうか。筆者の感ではやはり天皇の問題ではないかと思う。徳田球一が率いる日本共産党は天皇打倒を唱えたが、それはその時だけのことで、今日本共産党はもう二度とそれには触れないようであるし、右翼は言うまでもなく、左翼でさえ口にしなない。マスコミも絶対悪口を言わないどころか、絶対敬語を使う。旧憲法では、大日本帝国は万世一系の天皇之を統治すると天皇を最高意思決定権者即ち主権者としているが、終戦後の憲法では主権者は国民になり、天皇は日本国の象徴、日本国民統合の象徴になっている。

そういうことは別として、兎に角郁達夫が指摘した、日本は歴史始まって以来、ほとんど実権は軍閥：軍部が握り、天皇は言わばキリスト教に於けるキリスト、イスラム教に於けるアッラー、儒教における孔子的な存在であるというのは実に的を射ているし、天皇は日本人精神統一の所在であり、日本人の理想的な人間像であると思う。

6. 文学は後退、反動へ

中国に対する戦争は日本を益々軍国主義化し、軍部が権力を完全に掌握し、国民も洗脳され、全ての分野や側面に絶大な悪影響を与えた。文学も例外ではない。

郁達夫は「日本の侵略戦争と作家」⁶⁹⁾、「戦争突入後敵国と我が国の文芸の比較」⁷⁰⁾、「抗戦2周年敵国と我が国の文化の変遷」⁷¹⁾等一連の論文を発表し、日本文学の後退及び反動を指摘した。

明治維新以降、欧州から次から次と後を絶たずに入ってきた文明・文化・自由主義思想・自然主義文学等により、日本の近代文学が芽生え、急成長し、黄金時代を迎えた。尾崎紅葉を始めとする硯友社、長谷川二葉亭・国木田独步・田山花袋・島崎藤村等の自然主義文学及び夏目漱石・森鷗外等の非自然主義文学が日本近代文学の成立を表しているが、60年くらいの間に見事に綺麗な花を咲かせた。

然し、それ以上は長続きせず、大正時代に入ると同時に、その進展が急に止まってしまい、一種の虚無的な傾向を見せ始めた。勿論それは自然主義自体が袋小路に入り、行き詰ってしまったことにもよるが、日本の法治・憲政が崩壊し、軍部が再び横行跋扈し、思想・言論の自由が扼殺されたのが大きな原因である。一部の気鋭の若者たちが左翼文芸の旗を掲げ、プロレタリア文学を興した。小林多喜二・藤森成吉・前田河広一郎・葉山嘉樹・中条百合子等がその代表者である。ところが、昭和になってからは、その作家たちは殺されるわ、逮捕されるわで左翼文学は解体されてしまった。その中の極一部が豹変して御用文人になった。林房雄・片岡鉄兵がそうである。

自然主義にもニヒリズムや社会主義等の流れ或いは軍部の高圧にもめげず、自分自身の信念を押し通した大家である作家に白樺派の志賀直哉、ロマン派の谷崎潤一郎がいる。それに近く、やはり自分の主義主張を信じ、芸術的な良心を失わなかった作家に島崎藤村・正宗白鳥・徳田秋声・秋田雨雀がいる。

現在活躍している作家を分類すると、大体次のようになる。

第一類は、大衆文学系の作家である。そのうち、時代物を書くのが吉川英治・白井喬二等で、多かれ少なかれ武士道を宣揚しているので、軍部の共犯者と言える。現代物で、趣味本位のものを書き、芸術味・非自然主義の色彩を帯びている作家に横光利一・川端康成・武田麟太郎・丹羽文雄・尾崎士郎等がいる。

第二類は、左翼或いは芸術派、大衆文学の方から転向した作家、例えば島木健作・佐藤春夫・林芙美子・菊地寛・林房雄・片岡鉄兵・小島政二郎等は内閣情報部、軍部から派遣されて中国の武漢一帯にきた従軍作家で、軍部の太鼓持ちである。

第三類は、軍部に飼われている連中で、軍に職を持っているか、或いは従軍記者で、本来は作

家とは言えない奴等である。玉井勝利・火野葦平がそうである。後者が書いた、全然面白くなく、混戦の表現が実に支離滅裂な「麦と兵隊」と題する従軍日記により、彼は今度の戦争が生んだ最大の作家などと持ち上げられ、退屈極まりない「土と兵隊」が「文芸春秋」に掲載されるなど、今の日本の作家、日本の文壇のていたらくが分かる。

軍部の御用団体に日本農民文学懇話会なるものがあるが、そのメンバーの一人和田伝が軍部から金をもらい、農民作家と自称して農村部に行き、視察したり、宣伝したりして、農民の反戦的な動きを必死に抑え込もうとしたが、そのペテン師ぶりがすぐ「都新聞」に見破られ、軍部の苦心も水泡に帰した。

兎に角、日本の作家は軍部の高圧に耐えられず、18世紀乃至15、6世紀に後退し、自然主義の導入から始まった日本の近代文学は滅亡の道を辿っている。

マスコミにしても全く同じで、新聞の報道は官営の同盟社が独占し、激しい検閲、言論の完全な統制制度が敷かれ、正しい情報・理性的な言論は発表できなくなった。

国民の日常生活・余暇も戦時の管制下に置かれ、学生が喫茶店に入っただけいけないとか、洋服の誂えは禁止、未亡人は夫が戦死しても笑うべきで泣いてはいけない、金属性の服のボタン・家にある革製品は全部政府に渡す、御飯のお代わりは1回に、おかずは2品に限定とか、何から何まで戦時体制になり、「真似の文化」・「猿の文化」と言われる日本文化は既に絶滅の寸前である。

郁達夫はもともと日本通である上に、新聞・雑誌・書籍等に寝食を忘れて目を通し、顔が広く、要職にある人や著名人にも頻繁に会い、又新聞社・雑誌社・情報部等を通して情報収集に力を入れ、常に日本や中国、各国の動きを掌握していたし、時代感覚が敏捷で、筆法が鋭い、性格が情熱的なので、その書くもの・話すものが抗日救国宣伝活動に果たした役割は計り知れない。

V. 終わりに

郁達夫の日本観を概観してみると、彼の50年の生涯のうちの最後の8年間の支那事変或いは日中戦争の影響が決して小さくないことがよく分かる。日本文化を絶賛していたのが、急転直下、「猿の文化」とまで貶すようになったのがいい例である。但し、それは彼が豹変したのではなく、日本文化が変わったのである。強圧によって歪み、変質し、荒廃してしまったのである。そして、それをやったのは日本国民にあらずして、軍部である。終始一貫して、郁達夫は本来の姿の真の日本・日本人・日本文化が好きで、それを愛し続けた。

若き頃の彼は実に人間らしく、男らしく、日本の女性をこよなく愛した。もう耽美的と思える程である。ここで言う「人間らしく、男らしく」とは、人間の原点、男の原点に戻ってということである。人間も所詮は動物であり、その欲望は色々あるが、最も基本的なのはやはり食欲と性欲である。精神・意識・イデオロギーより先ず肉体・物質・現実である。社会・組織・政党は二次的で、人・個・個人が一次的である。体制・道徳・慣習のよう制約より人・本能・欲望の方が大事である。非我より自我である。概して言えば、内在・内界が主で、外在・外界は次である。若き郁達夫は内在・内界を外在・外界より尊重したのである。

「日本の女性はみな優しく可愛い。彼女たちが日本の歴史が始まって以来、代々に亘って受けて来たのは男性に絶対服従するという教育である。それに、もともと人口はそれ程多くないし、衣食住の性格も貧弱であるが故に、普通の女性の貞操に対する考えもわれわれ中国人程頑なでない。又纏足とか、家の奥深くに引っ込んでいるべきで、外出したり、人前に出たりしてはいけないという習慣はないし、仕事をしたり、出入りしたりするのは男と変わらない。だから、体も大抵肥えて大きいし、美しく立派である。決して中国の女性のように弱々しくて瘦せこけていて、まるで病人のような顔形ではない。更に列島には火山・温泉が又多く、その水分には鉱物性物質が沢山含まれている。それで、関東・関西の山間部に住んでいる女性の肌は滑らかで透き通っていて、きめ細かくて白くて、まるで瀬戸物のようなものである。東北の奥地、雪国の美女は日本でも雪美人と言われる程で、彼女たちの色の白さ、豊満でふくよかなこと、優しく、美しいことと言ったらもう申し分ない。」⁷²⁾

彼のデビュー、彼の異色さはこういったところから始まる訳であり、彼の非常に大事な側面であるが、それはあくまでも一側面、うわべと切っ掛けに過ぎず、彼の日本観の本質を、誰にでも分かるように、彼の言葉を借りて言えば、次のようになる。

「日本の文化は獨創性に欠けているけれども、その模倣は非常に創造力に富んでいる。礼法と道徳を中国に倣い、政治・法律・軍事及び教育等の制度・法則・方法はドイツを手本にし、経済は広く欧米に習った。そして、固有の、国のためなら命も惜しまない、勤勉で堅忍不拔の国民性が中心的な支柱となっている。その根はそれ程深くないけれども、枝や葉は見事に生い茂っている。発明や発見は全然ないけれども、成長は迅速である。私が留学した時には既に明治の世代により、維新は完成し、老木に青々とした枝が生え、古い瓶に新しい酒が盛られ、全く円熟そのもので、破綻のかけらも見えない。新興国の気概は壮大、立派で、国民の振る舞いも鷹揚である。」⁷³⁾

どの国・地域、どの国民・民族・人種にもその文化には普遍性の他にそれぞれ固有の、独特の個性、パーソナリティーがあり、バショ・ヒト・ブンカは渾然と融合し、一体化している。郁達夫は中国人であり、中国文化を創り、又創られた人間であり、中国人としてのパーソナリティーを具え持っており、戦争のようにその立場・態度・姿勢が明確を要求された時、彼はれっきとした中国人、中国人そのものであったのは言うまでもないが、その価値観・感情・性格・趣味の底辺・奥底のどこかに日本・日本人・日本文化とびったり合うものも備え持っていた。もう少しはっきり言うならば、郁達夫は日本人的な中国人であった。であるからこそ、彼は心から日本・日本人・日本文化を愛したのである。

彼が塩原の八幡宮で盆踊りを見た時のことであるが、次のように書いている。⁷⁴⁾

「踊り乍ら男女は又た歌ふ。その歌の原始的なる事、尾音悠揚にして哀調を帯びて居る事に、予は思はず涙を誘はれた。巳涼天気未寒時の夜、山の奥、男女の乱舞の中に立って、旅から旅へ漂泊へる旅客は、どうしてその哀音惨憺なる鄙歌に、泣かされざるを得ようぞ。

予には堪らなく盆踊りが好きになった。その原始的な音頭が気に入った。無邪気な此の若き美女の、何事をも打ち忘れた様子が気に入った。悲涼激越な鄙歌の歌音も気に入った。殊にかうした夜の薄黒い森の中の心的な頹廢的気分が気に入った。詩が三つ出来たのである。

「秋夜河燈浄業庵 蘭盆佳話古今談 誰知域外蓮壺島 亦有流風似漢南

桑間陌上月無痕 人影衣香舞斷魂 絕似江南風景地 黃昏細雨賽蘭盆
贈句投瑤事若何 悠悠清唱徹天河 離人又動飄零感 泣下蕭娘一曲歌」

文章といい、詩といい、正に日本文化そのものであり、又郁達夫その人である。

本稿は平成13年度奈良大学研究助成によるものである。

註

- 1) 伊藤虎丸・稲葉昭二・鈴木正夫編、郁達夫研究資料補編（下）、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、昭和49年7月、216ページ。
- 2) 駒田信二・松枝茂夫訳、現代中国文学6 郁達夫 曹禺、河出書房新社、昭和46年12月、41ページ。
- 3) 同2) 49ページ。
- 4) 同2) 54ページ。
- 5) 同2) 59ページ。
- 6) 王自立・陳子善、郁達夫研究資料（上、下）、天津人民出版社、1982年12月、203ページ。
- 7) 同6) 307ページ。
- 8) 同6) 62ページ。
- 9) 同6) 93ページ。
- 10) 許子東、郁達夫新論、浙江文芸出版社、1984年3月、164ページ。
- 11) 同10) 166ページ。
- 12) 同10) 4ページ。
- 13) 同10) 15ページ。
- 14) 同11)。
- 15) 張恩和編著、郁達夫研究綜論、天津教育出版社、1989年7月、71ページ。
- 16) 同15) 76ページ。
- 17) 同15) 79ページ。
- 18) 同15) 84ページ。
- 19) 同15) 87ページ。
- 20) 魯迅全集5 而已集・三閑集、学習研究社、昭和60年4月、292ページ。
- 21) 同15) 94ページ。
- 22) 同6) 162ページ。
- 23) 同2) 28ページ。
- 24) 同6) 92ページ。
- 25) 同2) 140ページ。
- 26) 同2) 161ページ。
- 27) 同2) 185ページ。
- 28) 同2) 198ページ。
- 29) 郁達夫文集第三卷、海外版、生活・讀書・新知三聯書店香港分店、花城出版社、1982年5月、73ページ。
- 30) 同10) 225ページ。
- 31) 同10) 228ページ。
- 32) 同6) 194ページ。
- 33) 同26)。

- 34) 同 2) 174ページ。
- 35) 同 6) 156ページ。
- 36) 同25)。
- 37) 同 2) 150ページ。
- 38) 同 2) 160ページ。
- 39) 同 2) 163ページ。
- 40) 同 2) 184ページ。
- 41) 同 2) 196ページ。
- 42) 同 2) 199ページ。
- 43) 同 6) 700ページ。
- 44) 同15) 103ページ。
- 45) 同 6) 704ページ。
- 46) 郁達夫文集第九卷、海外版、生活・讀書・新知三聯書店香港分店、花城出版社、1984年9月、349ページ。
- 47) 同15) 99ページ。
- 48) 同 2) 35ページ。
- 49) 同29) 14ページ。
- 50) 郁達夫文集第四卷、海外版、生活・讀書・新知三聯書店香港分店、花城出版社、1982年11月、92ページ。
- 51) 同50)。
- 52) 郁達夫文集第八卷、海外版、生活・讀書・新知三聯書店香港分店、花城出版社、1984年6月、31ページ。
- 53) 同50) 342ページ。
- 54) 同46) 283ページ。
- 55) 同 6) 66ページ。
- 56) 同 6) 144ページ。
- 57) 同50) 164ページ。
- 58) 同 2) 218ページ。
- 59) 同52) 294ページ。
- 60) 同50) 156ページ。
- 61) 同46) 273ページ。
- 62) 同52) 248ページ。
- 63) 同50) 181ページ。
- 64) 同52) 281ページ。
- 65) 同52) 324ページ。
- 66) 郁達夫文集第七卷、海外版、生活・讀書・新知三聯書店香港分店、花城出版社、1983年11月、104ページ。
- 67) 同52) 360ページ。
- 68) 同52) 82ページ。
- 69) 同66) 63ページ。
- 70) 同66) 104ページ。
- 71) 同66) 109ページ。
- 72) 同50)。

73) 同50)。

74) 伊藤虎丸・稲葉昭二・鈴木正夫編、郁達夫研究資料——作品目録・参考資料目録及び年譜——、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、昭和44年10月、125ページ。

提要

天才的诗人、作家、文学家郁达夫在中国文学革命中起了主将的作用，他是中国现代文学的先驱者。但是，他的一生却是悲剧的生涯。不少人，包括文学界在内，都诽谤他是什么颓废作家，朋友和妻子也背叛他，他母亲和哥哥在战争中悲惨地死在凶暴的敌人刀下，最后他本人竟于战争结束后不久，被日本宪兵所杀害。

他目睹日本人蔑视中国人，义愤填膺。但他从心里热爱日本人，绝口称赞并倾倒于日本文化。日中战争使日本失去了本来的美丽的面貌。军部是战争的罪魁祸首、它使文学也大大地倒退，使之面临灭亡的深渊。总而言之，他的日本观是爱憎交错的日本观。